

ジオノ文学における水の役割

山 本 省

キーワード：ジオノ文学 水 森林 『丘』 『世界の歌』

1. 序（この論考のねらい）

「ジオノ文学における檜の重要性—フランス人の意識に内在する自然信仰—」¹において、その大多数がキリスト教徒であるフランス人の意識のなかに意外にも自然信仰的な要素が存在しており、そうした傾向を色濃く受け継いでいる作家がジャン・ジオノであるということを私は明らかにした。さらに、そうしたケルト的とも言える精神構造においては森林と水がとりわけ重視されるのであるが、その森林とジオノの文学との関わりを解明する過程で、檜がもっとも重要な樹種であることを明らかにするために、いくつかの作品から檜が登場する場面を引用ながら、それぞれの描写の意味づけを行った。要するに、ジオノの文学において特権的な樹木である檜は自然の象徴としての役割を果たしていると言っても過言ではないということを示した。

今回の論考では、ケルト人たちに重視されていた自然界のなかのもうひとつの要素、水がジオノの文学でどのように扱われているかということを中心にしたい。その前に、水と同様にケルト人たちが特別視していたにちがいない太陽のことに少しだけ触れておこう。生命にとって太陽は必要不可欠だからである。

まず最初に、ジオノは断然水や雨が好きな作家だったということを確認しておきたい。ジャン・カリエールとの対話で、プロヴァンスは気に入っているかと訊ねられたジオノは、諸手を挙げて好きだと言うわけにはいかないが、プロヴァンスのマノスクで家族とともに楽しく暮らしていると答えたあと、残念なことにプロヴァンスには水が足りないと述べている。雨に恵まれている地方としてジオノはかつて訪問したことのあるスコットランドを挙げているが、その部分を引用してみよう。

かりに自分のお気に入りの土地に住むことができるのなら、私はよく雨が降る地方を選ぶだろう。自分が好きな土地に住むことが可能なら、私ならスコットランドに住んでみたい。私はスコットランドが気に入っているのです。あそこには神秘的な要素がある。雨が降るし、霧が出るし、未開拓の広大な土地が広がっているし、人口はきわめて少ないし、壮大な砂漠があるからです。²

そのあと、太陽について、それほど太陽を好まない理由は精神的なものかそれとも肉体的なものかとカリエールに訊かれたジオノは次のように返答している。

私は太陽が好きではありません。暑さも好きではありません。暑さは嫌いだし、太陽の光も嫌いです。私は、例えばイール=ドゥ=フランス³の柔らかな光にいつも敏感なのです。そうです。あのような土地に私の感性は向いているようです……。先ほどスコットランドについて話しましたが、スコットランドを旅したとき、自分が望むすべてのことをきわめて正確にかなえてくれる土地に来ているということがたちどころに実感できました。色彩、光景、土地の全体的な構成、人びと、住人たちの人がら、住宅、空の色、雲の色、樹木、動物たち、こうしたもののすべてが私の望んでいることにぴったりと呼応したのです。⁴

さらに、「私の本のなかで太陽が現れるときは、ほとんどいつでも忌まわしいドラマが生じる前兆になっています。あるいは、太陽はいつでも不幸の前兆なのです」⁵とまでジオノは極言している。こうした感情はオート=プロヴァンスの住人たちにとってはきわめて常識的で普遍的なものであるとジオノは力説する。「太陽への嫌悪感には誰もが持っている感情です。外出するときには、人びとはアラビア人のように身体を包みこむ。女たちは頭から腰の下まで長くて黒いヴェールをかぶる。男たちも帽子の下に頭巾をかぶり、顎髭や口髭や眉で顔を覆う。働くのに上半身を裸にすることなどありえないのです。収穫のときでさえそうです。かろうじて上着を脱ぐだけで、チョッキは着たままです。光のきらめきと反射が無限に重なりあうこの地方の風や寒気やあの青白い光が舞い戻ってくると、たとえ空が晴れわたっていても、人びとは身体を覆い、身体を包み、身体を隠すのです。」⁶

このように発言するジオノは、自らの罪深さを罰するために目を突き刺したエディプスの悲劇はぜひとも白昼に生じる必要があると考えているのである。

事実、真夏にオート=プロヴァンス地方を訪れると、雨がほとんど降らないので地面は乾燥し、森林の樹木も精彩を欠いている。オリーブの果実も水分不足でしんなりしていることもある。山火事が発生するのではないかと住民たちは心配しているし、毎年のように大規模な山火事が起きる。数年前に山火事が猛威をふるった痕跡があちこちに見られる。灌漑設備が普及しているおかげで、水不足の深刻な問題は起こらない。果樹園や野菜畑では大規模な灌水が行われている。しかし、この地方全体がこぞって雨の訪れを期待しているのが旅行者である私にも容易に理解できる。雨がたっぷり降る日本とは対照的に、オート=プロヴァンスでは年間降水量が600ミリ程度なので、そしてとりわけ夏季に雨がめったに降らないために、雨は渴望されている。

人間の生活にとって太陽がきわめて重要な要素だということは認めつつも、ジオノの好みを尊重して、私たちはジオノ文学における水の役割に限定して、ジオノの作品で水がどのように扱われているかということを検討していきたい。

2. 泉の光景

ジオノが生涯を過ごしたオート＝プロヴァンスのマノスク近辺では、年間の降水量が少ないということに加えて、このあたり一帯の地層が石灰岩なので水は地下に浸透しやすい。つまり利用するための水を確保するのが比較的むずかしい。だから水はいっそう貴重なのである。⁷

それに加えて、略奪者などから自らを防御するためであろうと考えられるが、古来、この地方の集落の多くは丘の上に作られている。マノスク近辺を見まわしても、ピエールヴェール、モンジュスタン、ドーファン、レイヤンヌ、リュルス、バノンという風に、たちどころに丘の上の村 (*village perché*) を数え上げることができる。当然のことながら、水を確保するためには深い井戸を掘削する必要がある。噴き上げてくる水はいっそう貴重なものだということが了解される。

このあたりの村の中央の広場には泉水が設置されていることが多い。マノスクでは市街の中央に位置している市役所広場の一角にある見事な泉からいつも水が溢れ出ている。マノスクの正面玄関 (ソヌリ門) から旧市街地に入り、ジオノが生まれた建物を左手に見ながらリュ・グランドを少し奥に進んでいくと、右側にサン・ソヴール教会が控えているが、その前の小さな広場に設置されている泉水盤は、1997年以來私が数回訪問したかぎりでは、水が流れているということは一度もなかった。今回 (2010年8月26日―9月4日) はじめて、華麗な装飾を施されている何本もの蛇口から水が勢いよく噴き出ているのを確認することができた。

リエス、グレウ・レ・バン、ヴァランソルなどデュランス河より東側の町や村ではほぼ例外なく泉水が用意されている。泉の脇にいくらか大きめの貯水槽がある場合 (例えばリエスやヴァランソル)、そこはかつて洗濯場として利用されていたことを示している。洗濯する女性たちの話し声が聞こえてくるような錯覚にとらえられるほど往時をしのばせる雰囲気が今なお保存されている。しかし、各家庭に水道が設置されている現在では誰も利用する者がいないため、洗濯場はいつでも静寂に包まれている。

ジオノの作品のなかで泉水がどのように扱われているのかといった事情を、まず人口に膾炙している『木を植えた男』のなかを探ってみることにしたい。主人公が無私無欲の精神を発揮して砂漠のように荒れ果てた高原に木を植え続けるというのがこの物語の主題である。木を植え続けることにより、森林を広げ、そこに小動物や鳥たちの生息を可能にし、その結果人間たちも居住できるような空間を再現しようと努めているのである。木を植えるという持続的な行為は必然的に、水のない砂漠のような土地を水が湧き出るような環境に変貌させていくことになる。だからこの物語において水の有無はもっとも重要な要素になってくる。

南仏プロヴァンスに特有の砂漠のような乾燥した高原 (灌木地帯) を歩く語り手「私」の描写で物語がはじまる『木を植えた男』の冒頭部分を見てみよう。

ル・コンタドゥール高原を思わせる高原を歩きまわっている「私」に手持ちの飲み

水がなくなってしまう。そして、かつては人が住んでいたはずの廃村にたどり着く。「前日から飲み水がなくなっていたので、水を探す必要があった。古くなった雀蜂の巣のように崩れはててしまっているその集落は、かつてはそこに泉か井戸があったに違いないと想像させるに充分だった。なるほど泉は残っていたが、水は涸れていた。」⁸事実、この地方にこうした廃墟はあちこちに点在している。そのあと、「私」は幸運にもひとり黙々と木を植えている男に出会い、彼の住居に案内され、そこに宿泊することを許される。

その男の羊小屋の井戸は次のように描写されている。「彼の水筒の水でようやく私は喉をうるおした。しばらくして、うねるような高原のくぼみにある彼の羊小屋に私は案内された。自然が作り出した非常に深い穴から、彼は素晴らしい水を汲みあげた。井戸の上には簡素なつるべが架かっていた。」⁹

しかしながら、この「自然が作りだした非常に深い穴」は、ブフィエ老人が行っている植林事業の過程で作られた、いわば一時しのぎの井戸であり、周囲にはまだ樹木が十分に生い茂っているわけではないので、それを豊かな井戸であると形容するわけにはいかない。有無を言わせぬ豊かな水は、あたり一面が健康な樹木で覆い尽くされるようになってはじめて湧き出てくることになる。物語の進展を無視して、いきなり結末近くの豊かになった村の描写に移動することにしよう。

今ではすべてが一変していた。空気までもが。かつて私を迎えた乾燥した粗暴な突風の代わりに、香りのよい柔らかな微風が吹いていた。水の流れを思わせるような物音が高原の方から聞こえてきたが、それは森を吹き抜ける風の音だった。さらに、いっそう驚くべきことに、水盤に流れ落ちる本物の水の音が聞こえた。泉水が作られていて、そこにはたっぷりと水が溢れていた。そして私が最も感激したのは、その泉水のほとりにすでに4年はたっているかと思われる菩提樹が植えられているということだった。その菩提樹は豊かな葉叢を茂らせ、まぎれもない復活の象徴になっていた。¹⁰

もう少し先では、泉水から水路が引かれている様子が描かれている。ジオノが水のことには注意しながら丹念に描写している様子がよく分かる。

1913年に私が見た廃墟の跡に、漆喰塗りの小奇麗な農家が数軒建っている。それらの建物は幸福で快適な生活を物語っていた。古くからあった泉は、森が蓄えた雨や雪によって養われ、ふたたび水が流れはじめていた。そこから水路が引かれていた。それぞれの農家のかたわらにある楓の茂みのなかで、泉水の水盤から溢れる水が瑞々しいミントの絨毯の上へと流れ出ていた。¹¹

豊かな水が流れるようになった結果、人間が居住することができるようになってきているということが紹介される。村の再生が森林の復活のおかげで実現したのである。

森林は水につながり、水は生物をはぐくむ。人間だけではなくさまざまな動植物がよみがえることができたのであった。

村々は少しずつ再建されてきたのである。地価がそこよりも高い平原からやって来た人々がその土地に住みつき、若さと活気と冒険精神を持ちこんだ。道を歩いていると、栄養のよい男女や、田舎の祭りに関心を持ち始めている笑顔の少年少女たちに出会う。穏やかな生活ができるようになったので表情が一変した昔からの住人たちに、新しく定住した住人たちを加えると、1万人以上がエルゼアール・ブフィエから幸福を与えられたことになる。¹²

エルゼアール・ブフィエのたゆまぬ植林のおかげで、桃源郷に例えられるような集落が、砂漠のような荒地から、まるで水のように湧き出てきたことになる。美しい物語に飢えている世界中の人びとが、ごく単純にこの物語を事実であると思ひこみ、ブフィエの不屈の意志力に心から感嘆したり、あるいはフィクションだと知っても、このような素晴らしい物語はきっとどこかに実在するはずだと想像しながら、さらにこの架空の物語は事実ではないとしても人間の真実を語っているなどと考えたりしつつ、読み継いでいるのである。

3. 泉は潤れることもある。

『丘』(1928年)という中篇小説では、物語の冒頭でさわやかな水音を響かせていた泉が、物語の途中で理由もなく枯渇してしまう。それに呼応するように、さまざまな災厄が訪れ、村人たちは狼狽の極致に追い込まれていく。

まず、水が豊かに流れている健全な泉が描写される。そこは人間だけではなく集落の周辺に生息している無数の動物たちにとっても恰好の水場なのである。物語のなかで最初にその水を飲むのは、人間ではなく猪である。動物たちと人間が共生関係にあることを雄弁に物語る場面設定である。

動物とレ・バスチッドの住人たちは泉で出くわす。岩場から流れ出るその水は、人間の舌にも動物たちの毛にも、とても心地よいからである。

夕闇がおりるとすぐに、爬行する蛇のように、足音をたてずに動物たちが灌木地帯から、歌を歌っている涼しい水のところにやってくる。

それに、日中でも、喉の渇きが激しくなると、動物たちは泉に近づく。

離れ猪が農場の方の匂いを嗅いでいる。

猪は人間たちの昼寝の時間を知っているのだ。

木々の葉叢の下を小走りに大きく迂回したあと、猪は身構えてから猛然と突進する。

さて、今、猪は泉にきている。水のなかを転がりまわる。泥が腹にへばりつく。

水の冷たさが、腹から背骨まで猪の全身を貫く。
猪は泉の水をがぶがぶと飲む。
水の心地よい冷たさが皮膚の上で揺れ動く。¹³

この寒村に、これ以降災難が次々と降りかかる。黒猫（フランスでは黒猫は災難の前触れと考えられている）が現れ、幼い娘が得体の知れない病魔に襲われ、村にひとつしかない泉が涸れ、大規模な山火事が発生する。死の床に臥せている 80 歳を越える村の長老ジャネがこうした災厄を引き寄せ、村人たちを自らのあの世への旅立ちの道連れにしようとするにちがいないと考えた村の 4 人の男たちは、ジャネを絞め殺そうと相談する。ジャネを絞殺するという役割を引き受けざるをえなかった娘婿ゴンドランがためらいがちにジャネの家に近づいていると、家のなかから飛び出てきたバベット（村の女性）がジャネは死んだということを知らせる。

ごく自然に猫が現れ、泉が涸れているだけなのに、男たちはそれがジャネの仕業だと妄想する。そして諸悪の根源であるジャネを殺そうとまで計画する。人間のこのような想像力の空しさについてパスカルが手を替え品を替え力説している¹⁴のは周知の通りだし、私たちは多種多様な神様まで考案するにいたっている。日本ではありとあらゆる場所を神のような存在が司っていると考え、昔から台所や納屋やトイレなどに神棚を祀ってきたのである。

ジャネが死んでしまうと、まるで悪霊が消え去ったかのように、泉の水が復活する。村人たちはふたたび美味しい水を味わい、生きていくことの幸せを噛みしめる。

ジョームとゴンドランは、泉水の縁石の上に坐っている。アプサントを飲んでいる。水飲み場の新鮮な水面で瓶が踊っている。星たちが冷たく輝く黄昏時である。

「俺たちの水は素晴らしい」

リュール山の影が大地の半分を覆いつくしている。家々から、皿の音や子どもをあやす歌声が聞こえてくる。¹⁵

『丘』は、家が 5 軒で住民が 13 名というこの地方に典型的な集落を題材にしている。住民たちの不安と恐怖が次第に大きくなり、ついにはそのはけ口を求めて殺人が計画されるにいたるが、幸いなことに老人ジャネが自然死によって向こうの世界に旅立ってくれたおかげで、男たちは犯罪に手を染めずにすんだ。住人たちにはふたたび平穏な生活が舞い戻ってきた。

村の中央の広場に泉があるように、泉の水と、泉が涸れてからは村の地下のどこかを流れているはずの空想の水脈が物語の中核に据えられている。かつて彼らの泉の場所を言い当てることのできた村の長老ジャネに、村のまとめ役ジョームがどうしたら地下に流れている水脈を察知することができるのかと問いただすが、ジャネは質問をはぐらかすだけで、まともに答えてやろうとしない。だから、ジョームの憎しみがつ

のっていくことになったのである。幻の水脈を村人のすべてが空しく思い描く。

また、知恵遅れのガグーが近くの廃村に湧き出ている泉を探し当てるといふ挿話も、一見唐突で皮肉な展開だと思えるかもしれないが、ジオノの物語にあつては、何らかの障害を背負っている人間がその障害ゆえにほかの研ぎ澄まされた能力に恵まれるというようなことはしばしばあるので、このガグーによる泉の発見もそうした事例のひとつと考えるとよいであろう。容姿が醜いと形容されているユラリーがガグーと泉のほとりで深夜の密会を楽しむという設定も、弱者2人が一種の桃源郷に遊ぶという図式になっている。全面的に危機感が高まっていく『丘』という物語に挿入されたこのおとぎ話のような要素は、この作品をひときわ重層的なものに仕上げるのに重要な効果をあげていると評価することができる。¹⁶

4. 危険な井戸と救いの滝

20の短篇集『憐憫の孤独』の冒頭に置かれている『憐憫の孤独』¹⁷では、井戸の修理が問題になっている。地元の井戸職人が危険だからと見放してしまった古い井戸の修復を、たまたま仕事を求めて司祭館を訪ねてきた旅回りの2人者に、いささかためらいながらではあったが、牧師は依頼した。大変な作業だったが、2人のうちの健康な方の男がひとりで夕方までかかって何とか修理を無事にやってのけた。

同じ『憐憫の孤独』の第19話『失踪する筏』では、家の外にある川や井戸ではなく、家のなかに掘られている貯水槽のことが問題にされている。この物語の冒頭では金持ちで孤児だった女性と結婚した男が、金を見当てに彼女を殺害したという事件が紹介される。つまり、危険は家庭のなかまで忍びこんでくるのである。その実例として、洞窟のような作りの農家のなかに掘られている貯水槽が次のように描写されている。

その農場を私は知っている。その農場は低い動物のように地面にしがみつき、石の背中はいかつい筋肉を備えている。片岩の黒い埃のなかで喘いでいる小さな頭のような建物は豚小屋同然だった。狭い窓はかろうじて銃身を通すほどの余裕しかない。建物の中に入ると、まるで洞窟のなかにいるときのように、足で探る必要がある。下におりたり上にあがったりする階段がいたるところにある。すべての階段が同じであるわけではない。ある階段は屋根裏部屋に通じ、別の階段は岩壁に穿たれた隠し場所へと通じている。下には、つまり家の暗い奥底には、いつでも井戸あるいは貯水槽がある。そこに落ちるのを防ぐための柵が取り付けられたりすることは決してない。それは階段を下りたところで、湿った大きな口を開けて欠伸している。それはいつもそこにある。立派な脅威であると同時に、いつでも救済手段が用意されているということでもある。それは、偶然にであろうと、その偶然を肘でいくらか押し進める場合であろうと、何かと役にたつ。女が子供をあまりに産みすぎたり、娘の品行がいささか思わしくなかったり、年若い

た父の死ぬのが遅すぎたりするような時には。¹⁸

同じ物語のなかで、愛妻と穏やかな老後の暮らしを送っている老人フィルマンが登場する。小川のせせらぎが聞こえる長閑な村で彼は何不自由なく暮らしている。「この前の夏、山のなかの小さな村で、私はここにこした小柄の老人と奔流に沿った岸辺でパイプを吸っていた。彼は動作がゆったりしていて、英知に満ちあふれ、目から唇にいたるまで晴れやかな表情だった。正午頃、彼の妻が愛情に満ちた小さな声で彼を呼んだ。彼は昼食に帰っていった。楽々と平らな野原を歩いている彼の姿を見ていると、彼の足は頑丈で、その思考は持続しているのが感じられた。」¹⁹

この老人の運命が、妻の死後一挙に破滅に向かってしまった経緯が語られる。彼は死ぬのがいささか遅すぎたのであろう。ある日、老人は小川の奔流のなかで死んでいるのが見つかる。

彼の女房は死んだ。フィルマン親父は自分の家のなかでひとりになった。そこで、甥がやって来た。彼らは人との触れ合いについて大いに話した。彼らは子供たちのこと、少女たちのこと、暖炉を取り囲む暖かい家庭などについて大いに話した。彼らは美味しいスープを、美味しい料理を、新鮮な煙草を、彼に見せつけた。老人の苦痛に対して若い女たちの優しい手を大いに役立てた。そこで、フィルマンは公証人のところに行った。

20日後、かなり苦くて悲しい真実を20回も口から吐きだしてから、フィルマンは奔流に身を投げた。

甥は赤ら顔の頑丈な男である。彼には血がみなぎっている。彼には食べていくために沢山のものが必要なのだ。山の大きなうねりのなかにある、あの向こうの黒い小さな小麦畑はあまり肥沃ではない。²⁰

こうした悲劇はジオノの作品のあちこちに登場する。マルセイユ生まれの伊達男に騙され、大都会で身を持ち崩したあと故郷の両親のもとに戻ってきたひとり娘が乳飲み子とともに農家の地下牢に閉じこめられているという物語もあるし、その娘が彼女を恋する新たな男と脱走したことが分かったと、自分の名誉が決定的に汚されたと感じ、デュランス河に身投げしようとその父親は考える。²¹

別の作品『二番草』では、危険だと知りながら報酬を目当てに井戸の掘削のために穴のなかにおりていった男が、地盤が崩れたために生き埋めになるという場面がある。この挿話はマノスクとバノンを往復する馬車のなかで、乗客たちが花を咲かせる世間話のひとつとして紹介される。廢墟同然の村オービニャーヌが見えてくると、今でもその村に住んでいるはずのマメッシュのことが話題にあがる。かつて臨月間近の妻マメッシュを連れたピエモンテ出身の夫は、ほとんど無一文でオービニャーヌにやってきた。地元の井戸掘り職人が掘り続けるのを拒絶した井戸に、彼はおりていく。

「ちょうどその時、ピエモンテ出身の男がオービニャーヌにやって来たんだ。ほとんど無一文で、しかも女房は臨月が迫っていた。ピエモンテから奴をここまで引っ張ってきたのは、運命としか言いようがない。

『俺が降りよう』と男は言った。

奴は少なくとも4メートルは掘り進んでいた。夜になると、蒼白な顔をして、ミミズのようにぬるぬるになって、身体中の毛を砂だらけにして、上がってきた。そして、ある夕べの6時頃、歯と歯で胡桃の実を噛みくだくような音が、突如、下から聞こえてきた。砂が流れ、石が落ちる音が聞こえた。奴は叫ばなかった。そのあと、奴はもう2度と上がってこなかった。奴を引き上げるのは不可能だった。夜中になり、ロープの端に角灯を結びつけて下におろして様子を見たところ、崩れ落ちた土砂の上まで水が上昇してきているのが分かった。水はどんどん上がってきた。水の上昇に合わせてロープを引き上げる必要があった。奴の上には少なくとも10メートルの水が湧きでてしまった。」²²

マメッシュの災いはこれだけにとどまらない。夫が亡くなったあと生まれた子どもまで失うという運命が彼女を待ちうけていたからである。柳の枝で編んだ籠を売って生計の足しにしていたマメッシュは、湿り気を好む柳が生えている小川の近くで籠作りの仕事をしていた。男の子は小川のそばで遊んでいた。そして悲劇が起こった。

「あるとき、あれはオリーブ摘みの季節だったが、谷間の下の方から狼の遠吠えのような声が聞こえてきたんだよ。その声は、梯子に登っているときのような恐怖で俺たちを縮み上がらせた。下の方、小川の近くからだ。一体どうしたんだろうと心配しながら、無言で、俺たちはみんなで果樹園を通っておりにいった。女たちはみんなでかたまってじっとしていた。そうするあいだも、その声はずっと吠え続け、俺たちの柔らかな腹を引き裂かんばかりだったよ。

女はまるで獣のようだった。まるで獣のように自分の子供の上につ伏せになっていた。気が狂ってしまったんだと思った。オネジーム・ビュスが彼女の身体を起こそうとして彼女に手を置いた。振り向いた女は、彼の手のがぶりと噛みついた。

何とかして、彼女を運ぶことができた。草の上に横たわっていた坊やは、すでに死んでおり、すっかり黒くなってしまっていた。目を拳ほどの大きさに見開き、口のなかには蜂蜜のように濃厚なよだれがたまっていた。死んでからすでにかなりたっていた。坊やが小さな手に茎の切れ端を持っていたので、毒人参を食べたんだということが分かった。坊やは毒人参の青々とした茂みを自分で見つけたんだよ。歌を歌っている母親からそれほど遠くないところで、毒人参で遊んでいたわけだ。」²³

水や水辺はいつでも人間に幸福をもたらすわけではない。井戸は人を飲み込むし、水は人を溺れさせることもある。水辺には危険な動物が潜んでいることもあるし、危険な植物も生えているのである。

反対に、そうした水の流れの恩恵が強調されている場面がある。見慣れぬ女性の様子を探るため水辺に生えている木に登っていたパンチュルルは、誤って流れに落下する。川に流され、滝を滑り落ち、意識を失っているところを、未来の妻アルスジュールに救出される。気絶したパンチュルルが意識を取り戻すとき、彼はすでに生まれ変わっているのであった。

彼の口に入っているのは細かい砂利である。そして、風の向こうから水の落ちる音が聞こえてきたので、彼はすべてを理解した。少しずつ感覚が戻ってきたのである。松の木の枝から墜落したことを思い出した。猿のように枝にぶら下がっている自分の姿が思い浮かんだ。肩が痛い。長いため息をつく。自分が草と乾いた土の上にいるかどうか確かめるために目を半開きにした。

たしかに土の上にいる。元気になれそうだ。きれいな月光のなかにポプラの影が見えた。

彼は考える。

「腹ばいになったままじっとしていたら、大変なことになるぞ」何とか反転しようとする。そしてごろりと仰向けになった。月が月光の白い指先を彼のまぶたの上のにせる。彼のかたわらで声が聞こえる。

「動いたわ」

もう月のことは考えずに、彼は目を開き、頭をもたげた。聞こえたのは女の声のようだった。

たしかに女だった。

彼女は彼のそばの草の上に坐っている。彼を見つめている。彼女は話した。誰も答えない。²⁴

『二番草』ではとりわけ水の役割が重要である。廃村になりそうだったオービニャーヌではあったが、いくつかの家が集まっているこの集落の端は崖になっており、その急な坂を下ったところに建てられているパンチュルルの家のそばに流れがあるという場面設定²⁵がそうさせているのかもしれない。

気絶していたパンチュルルを助けた女性は、彼との結婚を受け入れる。新妻が要望するがままに、パンチュルルはそれまでの狩猟中心の暮らしから、安定した収穫が望める小麦の栽培（つまり農業）へと自分の生活を変貌させていく。農業を確立させることによって、自分の家庭の安定だけでなく、立派な小麦を生産することができる集落の再生も実現できるようになっていくのである。そのきっかけを作りだしたのが、パンチュルルを未来の妻のところまで運んだ水の流れであり滝であった。

5. 『世界の歌』における河の役割

『世界の歌』において、河はその潜在的能力のすべてを発揮する。主人公アントニオは文字通り河の男であり、デュランス河を思わせる河の中州に住んでいる。

これは河の男アントニオ（水の象徴）と森の男マトゥロ（樹木の象徴）が、失踪してしまった後者の息子を探るために、河を遡行していくという物語である。息子は死んでいるどころか、恋人を作るだけにとどまらず、その恋人の許婚者に発砲し致命傷を与えてしまうといった破天荒ぶりで、生命力の横溢の限りを尽くしていた。上流の村で息子と合流したマトゥロとアントニオは、冬の寒さで凍結した河を筏で下るわけにもいかない。上流の村一帯を支配している牛飼いの男の王国で、降り積もる雪に閉じこめられた河の男と森の男は、すべてが氷解する春を待ちこがれる。マトゥロが殺害されるという不幸は避けられなかったが、春の訪れとともに2組の恋人たちは河を一挙に下る。ここではアントニオとダニス（マトゥロの息子）たちの恋に触れる余裕はないが、河の周辺で繰り広げられる恋と友情と冒険の壮大な一大絵巻物語と形容できるようなこの長篇作品では、水や河や雪や氷がきわめて重要な役割を果たしていると言することができる。物語は、当然のことながら、河の描写ではじまる。

夜。河は森のなかを両肩でぐいぐい押すように流れていた。アントニオは島の先端まで進んだ。先端の片側では水は深く、猫の毛のように滑らかだったが、もう一方の側では浅瀬のいななきが聞こえていた。アントニオは檜の木に触れた。手を通して木の震えを聴いた。それは山の男よりも太い檜の老木だった。カケスの島の最先端の河の流れとぶつかる場所に生えているので、根の半分は水の上に出てしまっていた。

「元気かい？」アントニオは訊ねた。

木は相変わらず震えていた。

「いや、元気ではなさそうだな」アントニオは言った。

彼は長い手で優しく木を撫でた。²⁶

河はまるで生きもののようには形容されている。河とともに樹木（檜）が登場していることにも注目しておこう。さらにこのあと、河の周辺に生息している鳥（カケス）たちの様子が「鳥たちは河の上を静かに、まるで雪が空を滑るように飛んでいった」²⁷という風に紹介される。いつもと違う何かを感じ取った鳥たちは眠ることができず、あちこち飛びまわっているのである。「向こう岸に生えている苔の不可思議な匂いを嗅ぎつけると、鳥たちは翼を狂おしく羽ばたいてすぐに舞い戻ってきた。投網を水に投げ入れるように、一斉に柀（とねりこ）の木々に襲いかかった。今年の秋は、はじめから古い苔の匂いを漂わせていた。」²⁸

河とその周辺の森林の様子はあちこちで詳細に描かれているが、もうひとつだけ河

の光景を引用しておこう。ここでは、河ははっきりと馬に例えられている。

アントニオにとって、それはいつも大切な瞬間だった。彼は1日中眺めていたのだ。太陽光線を浴びて自分の鱗を逆立てるこの河を。泡まじりの水を蹄で蹴散らしながら浅瀬をギャロップで走るそれらの白馬たちを。岩の回廊のなかで締めつけられ怒り狂って峡谷から出てくるあの緑色の流れの背を。このあと、流れは、自分の前に広がっている大きな森に出会い、柔軟な背をかがめ、木々のなかへ入っていく。今では、その流れはアントニオの周囲に広がっている。流れは彼の身体の末端を支えていた。彼の足から膝までを締めつけていた。²⁹

河の中州に住み、河から養分を補給し、河の流れに鍛えられている主人公アントニオは次のように描写されている。彼は河の化身とでも形容できる存在である。

裸のアントニオは背が高く筋骨たくましい男であった。前夜は、森の木陰で彼は少し縮まりすぎた。しかし今、彼はできるかぎり伸びをしている。彼は、上流の峡谷からはるか下流にいたる河の両岸で〈金の口〉のアントニオとあだ名されていた。土踏まずが反り返った彼の足は、石のように固く、松脂のような色合いのまん丸の踵を備えていた。その踵を軸に美しい円弧を描いて、足は前進した。足の指はそれぞれしかるべき位置にあり、互いに離れあっていた。その美しい脚にふくらはぎはほとんどついていなかった。小さな球のようなふくらはぎが、かろうじて指ほどの厚さの網状の筋肉につなぎ止められていた。彼の脚の曲線は膝で中断されることはなかった。膝もその曲線のなかに加わっているために、その曲線はもっと上まで続き、腿の肉のすべてをその限界のところまで持ち上げつつ上昇していた。水の愛撫、水の知識、水の怒りは、この男のがっしりした身体つきのなかに入りこんでいた。腿は切断された木の枝のように丸い骨で横腹に結びついていて、素晴らしい泳ぎ上手に特有の平たくて柔軟な腹の下部にはブロンドの毛が茂り、その毛は太陽と風に親しみ、動物の毛のようにうねり、ちぢれて密生し、牧羊犬の毛のように丈夫だった。その毛は腿と腹のあいだのくぼみを満たしていたが、身体の両側にもはみ出していた。その下に、不可思議な命令がほとぼり出てくるあの身体の一部が住まっていた。それは、時として夕方になると、魚網を手放し、水のなかに飛びこみ、下流へ滑るように泳ぎ、村の近くの洗濯場の近くで係留するといった行動となって彼に現れた。そして彼は葦の茂みのなかに隠れ、動物のような声で歌いはじめるのだった。若い娘たちはドアを開き、時には河に向かって野原の斜面を駆けおりてきた。彼女たちの麻のスカートは翼のようにぱたぱた音をたてた。³⁰

この他にもアントニオの堂々たる姿の描写は枚挙にいとまがないが、アントニオが巨大な鰻と戯れるという人間と魚の交感の場面³¹があることを指摘するにとどめたい。

物語は終始一貫してこの河の周辺で展開していく。最後に、物語の終幕を飾る河の描写を示すことによりこの項を閉じることにする。

氷河は溶けていた。岩のあいだの縦溝に細く小さな氷河の舌が残っているだけだった。さまざまな滝で覆われている山は太鼓のようにとどろいていた。小さな流れはもうなくなってしまった。頑丈な腰を持ち、氷塊や岩石を運ぶ筋肉質の奔流が、きらきら輝き、泡で煙りながら、樅の木よりも高く跳び上がり、岸边を深く掘りさげ、森のさまざまな断片を運び去っていった。水、岩、氷、木々の骨、これらが鋼鉄の太い枝のように振れながらその地方を流れ、ごうごうという唸り声をあげ、大河に合流していった。大河は、普段の川床よりずいぶんと遠いところまで大量の水を運んでいったので、孤立した農家、木立、小さな丘、ポプラ並木などを飲みこんでしまい、もうほとんど動かなかった。丘のうねりのなかに迷いこんだ大河は、ゆっくり川面を太らせていった。遠くの岸边から、河のまん中を堂々とした流れが白波を立てているのがかろうじて見えるだけだった。³²

2組の恋人たちを乗せた筏は水かさを増した河の流れに運ばれ下流に向かっている。殺されたマトゥロや、放火されほぼ全滅した牛小屋の復讐を果たすことは断念して高地の牧草地にあがっていこうとしている牛飼いの親方モドリュヤ、相変わらず独身を貫き親身になって村人たちの相談に乗っている医師トゥッサン、こうした者たちを上流の村に置き去りにして、筏の4人は自分たちの住むべき大地に向かい希望をふくらませて河を下る。彼らを上流に導いていったのも河であったし、今彼らを安らかな暮らしが待っているはずの下流の村へ運んでいるのも同じ河である。河はこの物語の中心であり魂でもあるとすることができる。

6. 結論（水のある平穏な光景）

水の味はアプサントとともに味わうといっそうその美味しさがよく分かるというジオノの父親の微笑ましいエピソードと『丘』冒頭の平和な情景を紹介して、この論考を締めくくることにしたい。

ジオノの父親は1912年に9000フランの遺産を相続した。それを資金にして、彼はまずオリーヴの木が茂っている小さな別荘を購入し、それをバスチドン（bastidon、小別荘）と名付け、そこに井戸を掘るということを考え付いた。1メートル掘るたびに374フランかかったとジオノは語っている。そして11メートル掘り進んだところで、ついに水が湧き出てきた。そのときの様子をジオノは以下のように語っている。

やっと、11メートルあたりで、水が出てきたのです！今でもあの時の光景が思い浮かびます。現場にいた父は有頂天になり歓喜に酔いしれていた。それはすごいことでした。私はすぐにアプサントの瓶を買うために町まで走っていかされま

した。というのは、アプサントとともに水を味わうのが習慣だったからです。アプサントで水の味を確かめたあと、父はグラスに透明で非常に美しいその水を満たしました。そして彼は町に戻ったのです。とても遠かった。グラスを持ったままほぼ 1800 メートルも歩く必要があったのです。グラスをまるで聖体のように注意して手で運んでいきました。母の店に到着して、父は言った。

「さあ、ポリヌ、飲んでみろ、お前の水だ。ついに終わった。水は出た！」

母は答えたものです。

「あなたの水を一体どうしろと言うのよ。もうこれで 6000 フランもかかっているのよ」

しかし、ついに、うまくいった。井戸は掘れたし、水も出た。別荘もできたのです。私たちには、あの上のオリーブの木々に囲まれた小さな家、1 ダースばかりの樹木の生えている小さなオリーブ畑、さらに2本のサクランボの木が残されたというわけです。³³

靴職人として生涯を送った父親を敬愛していたジオノは、明らかに、この懐かしいエピソードを回想することにより、父親の貴重な遺産である泉に焦点を当てている。ジオノは父親から多額の金銭を受け継ぐということはなかったかもしれないが、何ものにも代えがたい井戸のある小別荘を引き継いだ。それとともに、水やオリーブやサクランボを大事に守りながら、父親の暮らしぶりの思い出を心のなかで反芻することができたのであった。

中篇物語『丘』のはじめの方で、ゴンドランがこれからアプサントを飲もうとしている情景を思い浮かべながら上の挿話をお読みいただきたい。『丘』冒頭の情景は、自然と人間が一体化している平穏で微笑ましい風景である。これはジオノの日常生活の周辺のあちこちで繰り返されていたはずのオート＝プロヴァンスに典型的な夕べの光景であろう。1日の仕事を終えた男が泉で汲んできた水をアプサントに注ぎそれを飲むという、この地方の村々の夕べをいろどる平和な光景である。

今日、ゴンドランはテラスに出ている。片手で酒瓶とグラスを2つ持ち、他方の腕で新鮮な水が一杯入った水差しを胸に当てて持ち運んでいる。そこからズボンまで水が滴り落ちている。片足でテーブルを整え、水差しとグラスを、さらに注意深く瓶をその上に置く。

夏の夕方、6時である。洗濯場の方で誰かが歌っているのが聞こえる。

両腕を振り回し、シャベルを使って働いた仕事のために折れ曲がってしまった大柄の身体を、2度に分けて伸ばす。2度目の屈伸で身体がすっきり伸びると、今度はおならをする。それがいつもの習慣だ。

彼は坐る。グラスをひとつテーブルの上を滑らせて自分の前に引き寄せる。酒瓶を日にかざす。緑の液体が半分ほど入っている。底には、草や葉や小さな褐色の種が絡まり合って溜まっている。それは丘に生えているヨモギ、郵便配達人に

注文して持ってきてもらったアニス、そして自家製の古くなったマール³⁴で、彼が自分で作ったアップサントである。

一滴、また一滴と彼は水を注ぐ。大きく黒い手で彼は水差しを握りしめている。疲れた様子もなく、彼はグラスの上に水差しを傾けている。³⁵

ジオノ自身はアルコール飲料はそれほどたしなまなかったと言われているが、訪問客にはしかるべきワインなどの飲み物を提供するのが常であった。もちろんアップサント（あるいはパスチス）も常備されていたであろう。父親の思い出を回想するにとどまらず、農民や職人たちの水やアップサントとの接し方をこういう風にきわめて具体的に再現することにより、ジオノはオート＝プロヴァンスの人間と自然に精彩あふれる生命を吹き込むことができた。溢れ出る水にうるおされている生活こそ豊かな生活と形容するにふさわしいという確信を抱いていたジオノは、これまで検討してきたような水に関わるさまざまな情景を自分の文学のなかにふんだんに取り入れたのであった。

ジオノは最初の発表作『丘』の冒頭で泉に恵まれた住人の幸福な情景を提示するとともに、その泉の水が涸れてしまい住人たちが次第にパニック状態に迫いつめられていく様子を克明に描写した。さらに、『憐憫の孤独』や『二番草』では井戸を掘削することに伴う危険を物語り、河の周辺で物語が展開する『世界の歌』では、魚を提供し筏を流してくれる河が冬になると凍結し通行不能になってしまう様相が示された。『木を植えた男』では、大規模な植林のおかげで、砂漠同然だった高原に水が湧出し、動植物のみならず人間が生活することも可能になっていく経緯が童話風に綴られていた。

以上、私たちはジオノのいくつかの作品では水がいわば物語の通奏低音として鳴り響くように設定されており、水が人間の生活にとって必要不可欠であると同時に、水は時として人間に危害を加えることもあるということを確認した。ジオノのさまざまな物語に満ちあふれている水をめぐる鮮明なイメージを通して、私たちは水と人間の関わりはじつに緊密だということを理解することができた。

注

¹ 山本省「ジオノ文学における櫛の重要性—フランス人の意識に内在する自然信仰—」、環境への人文・社会的アプローチ・報告書、信州大学全学教育機構人文・社会科学教育部門、2010年3月、49-58頁。

² Jean Giono, *Entretiens avec Jean Carrière*, La Manufacture, 1996, p.89. (訳文は拙訳を用いる。)

³ パリ周辺の地方。

⁴ Jean Giono, *Entretiens avec Jean Carrière*, p.92.

⁵ *Ibidem*, p.92.

⁶ *Ibidem*, pp.92-93.

⁷ セザンヌがその威容を描いたことで広く知られている石灰岩のサント＝ヴィクトワール山は陽光を浴びると燦然と輝く。このあたりの石灰岩の地層には鍾乳洞があちこちに散在しているという事実を指摘しておきたい。

⁸ ジャン・ジオノ『木を植えた男』、山本省訳、彩流社、2006年、10頁。

⁹ 同書、14頁。

¹⁰ 同書、50-51頁。

-
- ¹¹ 同書、54 頁。
- ¹² 同書、54-55 頁。
- ¹³ Jean Giono, *Colline*, Œuvres romanesques complètes, Tome 1, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1971, pp.127-128. (訳文は拙訳を用いる。)
- ¹⁴ 例えば、次の有名な 1 文を参照されたい。「想像力。それは人間におけるあの支配的な部分であり、誤謬と錯誤を支配しているあの女主人のことである。想像力は、いつも狡猾であるとは限らないので、いっそう狡猾である。何故なら、想像力が、かりに虚偽の間違うことのない規則であるならば、それは真実の間違うことのない規則になりうるであろうに。」(Blaise Pascal, Fragment 44 des *Pensées*, Œuvres complètes, Aux éditions du seuil, 1963, p.504.)(訳文は拙訳を用いる。)
- 『気晴らしのない王様』は「〈気晴らしのない王様は、悲惨に満ちた王様だ〉と言ったのは誰だったろう？」(ジャン・ジオノ『気晴らしのない王様、酒井由紀代訳、河出書房新社、1995 年、254 頁)という文章で締めくくられているが、草稿段階では「気晴らしのない王様は悲惨に満ちた王様だ、と言ったのはパスカルである」とジオノは書いていた。パスカルの『パンセ』はジオノの愛読書だったのである。
- ¹⁵ Jean Giono, *Colline*, pp.216-217.
- ¹⁶ ガゲーとユラリーの重要性についてはすでに論じたことがある。拙論「ジャン・ジオノの『丘』の独創性」(信州大学人文社会科学研究第 2 号、2008 年 4 月、177-192 頁)の 189-190 頁を参照されたい。
- ¹⁷ Jean Giono, *Solitude de la pitié*, Première histoire de la *Solitude de la pitié*, Œuvres romanesques complètes, Tome 1, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1971, pp.433-440.
- ¹⁸ Jean Giono, *Radeaux perdus*, Dix-neuvième histoire de la *Solitude de la pitié*, Œuvres romanesques complètes, Tome 1, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1971, p.534. (訳文は拙訳を用いる。)
- ¹⁹ *Ibidem*, p.535.
- ²⁰ *Ibidem*, p.535.
- ²¹ このことに関しては拙論「友情の記念碑—『ボミューニュの男』論考—」(信州大学人文社会科学研究、第 4 号、2010 年、2-18 頁)の 9-15 頁を参照していただきたい。
- ²² Jean Giono, *Regain*, Œuvres romanesques complètes, Tome 1, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1971, p.327. (訳文は拙訳を用いる。)
- ²³ *Ibidem*, p.328.
- ²⁴ *Ibidem*, p.375.
- ²⁵ *Ibidem*, pp.329-330.
- ²⁶ ジャン・ジオノ『世界の歌』、山本省訳、河出書房新社、2005 年、4 頁。
- ²⁷ 同書、4 頁。
- ²⁸ 同書、4 頁。
- ²⁹ 同書、10 頁。
- ³⁰ 同書、21-22 頁。
- ³¹ 同書、36-37 頁参照。
- ³² 同書、308 頁。
- ³³ Jean Giono, *Entretiens avec Jean Amrouche et Tao Amrouche*, Gallimard, 1990, p.97. (訳文は拙訳を用いる。)
- ³⁴ 葡萄の搾りかすで作る蒸留酒。
- ³⁵ Jean Giono, *Colline*, p.132.

参考文献

1. Jean Giono, *Entretiens avec Jean Carrière*, La Manufacture, 1996.
2. Jean GIONO, *Colline*, Œuvres romanesques complètes, Tome 1, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1971, pp.125-218.
3. Jean Giono, *Regain*, Œuvres romanesques complètes, Tome 1, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard,

1971, pp.321-429.

4. Jean Giono, *Solitude de la pitié*, Œuvres romanesques complètes, Tome 1, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1971, pp.431-538.

5. Jean Giono, *Entretiens avec Jean Amrouche et Tao Amrouche*, Gallimard, 1990.

6. Blaise Pascal, *Pensées*, Œuvres complètes, Aux éditions du seuil, 1963, pp.493-641.

7. 山本省「ジオノ文学における檜の重要性—フランス人の意識に内在する自然信仰—」、環境への人文・社会的アプローチ・報告書、信州大学全学教育機構人文・社会科学教育部門、2010年3月。

8. 山本省「ジャン・ジオノの『丘』の独創性」、信州大学人文社会科学研究、第2号、2008年4月、177-192頁。

9. 山本省「友情の記念碑—『ボミュージュの男』論考—」、信州大学人文社会科学研究、第4号、2010年3月、2-18頁。

10. ジャン・ジオノ『木を植えた男』、山本省訳、彩流社、2006年。

11. ジャン・ジオノ『世界の歌』、山本省訳、河出書房新社、2005年。

12. ジャン・ジオノ『気晴らしのない王様』、酒井由紀代訳、河出書房新社、1995年。

(信州大学 全学教育機構 教授)

2011年1月5日受理 2011年2月2日採録決定